

スポーツボランティアにおける心理学的エスノグラフィー

○ 谷口明日香 (びわこ成蹊スポーツ大学大学院), 豊田則成 (びわこ成蹊スポーツ大学)

キーワード: スポーツボランティア, 事業の立ち上げ, 質的研究, エスノグラフィー

1. 緒言

本研究の関心事は、スポーツボランティアに関わる社会的相互作用の変容について質的に検討することにある。新たなスポーツ文化の確立を目指し、スポーツを「支える人」の存在も重要である(文科省, 2010)と示しているように、日本において、国際規模大会の開催を控えている今、スポーツボランティアへの関心も高まっている。そして、これまで、スポーツボランティアに関して「参加動機」や「継続要因」を中心に進められてきた。

しかしながら、これまでの研究ではボランティア個人の心理的要因や変容を追ったにすぎず、スポーツ場面におけるボランティアの相互作用に着目した研究は希少であり、さらに、ボランティアの事業体に身を置き、そこでの日常を記述し、可視化することはスポーツボランティアという文化が発展するために必要であると考えられる。

したがって本研究では、「**スポーツボランティアとその事業の運営スタッフとスポーツボランティアを取り巻く社会がどのように関わっていたのか**」というリサーチ・クエスチョン(Research Question: 以下, RQ と称す)を設定し、発展継承可能で有益な仮説的知見を導き出し、スポーツボランティア現場への提言をなすことを目的とする。

2. 方法

1) 調査対象: スポーツボランティア事業に関わる事象であり、ボランティアと事業の運営スタッフとそれらを取り巻く社会との相互作用である。

2) 調査方法: スポーツボランティア事業に関わる人々を特定の文化を持つ集団とみなし、この集団の中で何が起きているかを理解するためにエスノグラフィーを行った。そして、スポーツボランティア事業における事象を観察し、記述したものを観察データとした。

3) 分析方法: 得られた観察データをもとに質的研究法の代表手法の1つである修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(木下, 2003)を参考に分析を行った。

3. 結果及び考察

分析の結果から、「ボランティアとその事業の運営スタッフとスポーツボランティアを取り巻く社会がどのように関わっていたのか」というRQに対し、「①ボランティアに対する表面的な関わりと、②スポーツ現場とのズレが広がりから、ボランティアとスポーツボランティアを取り巻く社会の両者に③関わることを不安に感じるが、両者に関わりながら④現場の理解を試みることで、⑤ボランティアの活動環境を重視するようになり、これらを繰り返すことで、⑥地域におけるスポーツボランティアへの理解が深まる」というプロセスでスポーツボランティア事業において事業の取り組みを行うという仮説的知見を導き出した。

4. 結論

上記のような考察から、ボランティアと事業の運営スタッフとスポーツボランティアを取り巻く社会が関わりを広げ、集約するというそれぞれが独立した存在であったが、関わりつつも統制するというように互いに作用していくという2つの段階で事業を展開し、ボランティア文化の定着と地域にスポーツ文化を醸成することができるということを導き出した。

以下の3点をスポーツボランティアの現場への提言とする。

①事業の立ち上げ段階においては、横方向への関わりを広げていくことが重要である。

②ボランティアの声に寄り添うことが事業の発展に繋がることを理解しておく。

③両者への支援的な立場が、スポーツボランティア事業を通じた社会への貢献に繋がる。

5. 主要な引用参考文献

山下博武・行實鉄平(2015) スポーツ・ボランティアに関する研究動向—スポーツ経営学からの批判的考察—, 徳島大学人間科学研究, 23: 39-55.

木下康仁(2003) グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い—. 弘文堂. 東京.

